## 西地・東地遺跡

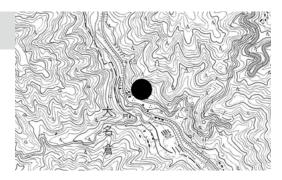
所 在 地 北設楽郡設楽町大名倉字西地、東地 (北緯35度6分41秒 東経137度32分37秒)

調査理由 設楽ダム

**調査期間** 平成28年10月~12月

調査面積 340㎡

扣 当 者 樋上 昇・川添和暁



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダム関連事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会より委託を受けて、平成28年10月から12月にかけて実施した。調査対象範囲は平成26年度調査14B区と14C区の間にある町道部分で、面積は340㎡である。

立地と環境 遺跡は標高約450m、寒狭川左岸の山麓緩傾斜地および河岸段丘面上に立地する。当地 は大名倉地区の北西端にあたり、寒狭川で解析された谷地形が開け始める地点に位置する。寒狭川の対岸側には、昭和43 (1968) 年、早稲田大学の調査により縄文時代後期の遺物が多く出土した、大名倉遺跡が位置する。

調査の概要 遺構・遺物は調査区中央を中心に確認された。調査は、縄文時代と中世以降の、大きく 2時期に分けて行った。

**縄文時代** 縄文時代の遺構としては、土坑群・ピットが確認された。北側中央の高位部分を中心に 径1m以上を有する大型の土坑が10基ほど集中して確認された。大型の土坑内には台石な どや大きな礫が多量に含まれており、154SK・266SK・310SKでは、掘り方に沿って板石な

集石のある どが検出された。これら礫の一部には被熱痕がみとめられる。121SKも、埋土内に板石な大型土坑 どが多量にみつかった土坑であるが、炭化種実(堅果類)も確認されたことから、貯蔵穴であったと考えられる。165SKと303SKは西側の低位部分で重複して見つかった大型土坑

貯蔵 穴 である。165SKは上層の浅い皿状堆積を呈する土坑で、熔結凝灰岩の石核が見つかったほか、中央の凹みに向かって大きな台石や被熱礫、土器底部などが出土した。303SKは、より大きな掘り方を有する下層の土坑で、土器のほか礫が多く出土した。

中世以降 調査区北側の、縄文時代の大型土坑群分布域の西側で、中世以降の遺構・遺物が多く見つかった。遺構には、竪穴状遺構・土坑・ピットがある。061SXは1辺5mほどの不定形な

**竪穴状遺構** 落ち込みとして検出されたが、調査によって重複関係をもった2基の竪穴状遺構であることが明らかとなった。掘り方の周囲内外にはピット列が認められた。中央には炉跡などの

鉄 淳 痕跡は確認されなかったものの、焼土粒や炭化物を含む埋土内から鉄滓が出土した。調査 区北西端でも、長径1mほどの浅い土坑 (253SK) 内から鉄滓が出土した。

出土遺物 縄文時代の出土遺物には、土器・石器・石製品がある。土器は縄文時代後期初頭が主体で、早期後半や中期後半のものも若干含まれる。石器では、石鏃・尖頭器・スクレイパーのほか、磨石敲石類と石皿台石類が多く出土した。中世以降では、古瀬戸後期の天目茶碗や平碗のほか、常滑甕や砥石、銅銭などが出土した。

ま と め 今回の調査で、14B区で見つかった遺構とあわせての縄文時代集落跡全体の様子が明らかとなった。16区は、後期初頭の貯蔵穴を含む大型土坑群の分布域であったことが明らかとなり、集落景観を考える上で、重要な調査事例となったといえる。

(川添和暁)



西地・東地遺跡縄文時代遺構位置図 (S=1/300) 【マス目は5m】